

発行所(郵便番号100)  
東京都千代田区丸の内2-4-1  
丸ノ内ビルディング617号室  
社団法人スウェーデン社会研究所  
Tel (3212) 4007・1480  
Fax (3212) 1447  
編集責任者 岡沢 憲 美  
印刷所 関東図書株式会社  
定価300円(年間購読料四千円)  
1994年11月25日発行  
No.291 第26巻11号  
(毎月1回25日発行)  
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

# スウェーデン社会研究月報

No.291

Bulletin Vol. 26

No. 11

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning  
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)  
Marunouchi - Bldg., No.617 Marunouchi, Chiyoda - ku, Tokyo, Japan.

## Article on Oe Kenzaburo

大江健三郎氏のノーベル文学賞受賞によせて

Ministor Lars Vargö

スウェーデン大使館公使 ラーシュ・ヴァリエー

The choice of Oe Kenzaburo as winner of the Nobel Prize for Literature 1994 was a popular one in Sweden. Mr Oe proved himself to be a charming and witty person in the many interviews that followed upon the announcement of the prize winner. What also caught the heart of the Swedish people was the way he treated his son, Hikari. Handicapped people in Sweden have laboured for many years to reach the relatively accepted position that they now have in the Swedish society, but one important aspect they usually lack, that they are a source of pride to their parents.

Not too much of Oe's literature has been translated into Swedish, only the three novels Man'nen gannen no futtoru, Kojintekina taiken and M/T to mori no fushigina monogatari. If it had been, maybe the picture of Oe had would been different. In contrast to Oe's inviting personal character, his literature is definitely not easy too read. The reader has too struggle with long sentences filled with complicated allusions and will also often find a recycling of themes and ideas. If one has read Kojintekina taiken and moves over to

Man'nen gannen no fottoboru, believing it will reveal a new exciting side of the author, one will get disappointed. The theme comes back as one reads through his novels, and the author becomes increasingly accusing of the establishment and its difficulties in accepting what's different.

But once having been disappointed one will discover a world mixing fantasy with reality, pleasures with hardships and new landscapes with the old. As Oe repeats his themes he also continuously weaves in new ones.

Also, parallell to his novels are his sharp essays. Hiroshima noto, for instance, has been used in many Japanese schools as more or less a textbook on the important subject of disarmament. His Atarashii bungaku no tame ni and the recent Shoetsu no keiken not only shows a deep rooted humanism, but also a brilliant way of treating creativity in literature.

What is sad, however, is the fact that so little of his vast production will remain untranslated. There are not enough



<input type="checkbox"/> 環境大臣	アンナ・リンダ Anna Linde 37歳
<input checked="" type="checkbox"/> 住宅大臣	ヨルゲン・アンダション Jorgen Andersson 48歳
<input type="checkbox"/> 社会大臣	インゲラ・ターレン Ingela Thalen 51歳
<input type="checkbox"/> 副社会大臣	アンナ・ヘドボリィ Anna Hedborg 50歳
<input checked="" type="checkbox"/> 在住外国人大臣	レイフ・ブロムベリィ Leif Blomberg 53歳
<input type="checkbox"/> 交通大臣	イネス・ウースマン Ines Uusmann 46歳
<input type="checkbox"/> 文化大臣	マルゴット・ヴァールストレム Margot Wallstrom 40歳
<input checked="" type="checkbox"/> 教育大臣	カール・タム Carl Tham 55歳
<input type="checkbox"/> 学校大臣	イルヴァ・ヨーハンソン Ylva Johansson 30歳
<input type="checkbox"/> 農業大臣	マルガレータ・ヴィンベリィ Margareta Winberg 47歳

★男性閣僚	11名	女性閣僚	11名
★平均年齢	47.7歳		
★年齢構成	60歳代 1名	50歳代	10名
	40歳代 8名	30歳代	3名
★地域構成	22閣僚中16名がストックホルム選出		

☆ 10月27日(木) 午後6時より8時30分まで、丸ノ内三井ビル4階の株式会社トーモクの会議室をお借りして開催した。

講師には、久しぶりに日本に帰国され、先頃東京書籍より「スウェーデン四季暦」を出版された訓覇法子氏を迎えて「誤解される福祉国家スウェーデン：その実像と最近の状況」をテーマにスライドなどを使いながら話して頂いた。

お話のなかでまず、日本では福祉国家と福祉社会の違いに言及されないまま混同されており、福祉国家の理念についての吟味されていないままになっている。

こうした漠然とした理解と、整備されていた個々の社会保障の機能やサービスの内容にのみ関心が集中とが組み合わされて、社会的な機能についての全体的な把握を疎かにした評価となり、悪いイメージとしての「高福祉・高負担」を一般的にする結果となっている。

こうした制度やサービスなどの個別評価が福祉国家の判断基準として、相関する部分を見ない単眼的な発想による検証を正統化して、歪められたスウェーデン像に影響し、日本での誤解を大きくしている点を指摘された。また、今回の総選挙の結果からみた現在のスウェーデンについての状況とEU加盟の国民投票を控えた今後についても話して頂いた。

☆ 連続講演会 11月2日(水)、11月30日(水)の両日、午後6時より8時まで、丸ノ内三井ビル4階の株式会社トーモクの会議室にてスウェーデン大使館の二等書記官であるレネ・アンダション氏と日本に長くお住まいのマリアヌ・ミヤモトさんを講師にお迎えして、「スウェーデンと日本を考える」というタイトルでアンダション氏とミヤモトさんそれぞれが、二つの国住んだ体験に基づいて社会的、文化的な違いを話して頂いた。学生時代、就職、転職、結婚、子育て、学校教育といった様々な場面について、普段はなかなか聞くことのできない日本にいられてからの生活体験や印象について非常に興味深く面白い比較をして頂いた。

☆ 11月11日(金)午後6時より8時まで、新丸ビル地下A会議室にて、講師には青木のぞみさんを迎えて、「スウェーデンの人権は教育 子どもの権利条約・統合教育」をテーマに、遠山真学塾で視察された際のスライドを使いながら統合教育の状況を、そして、日本でもいろいろと話題となった子どもの権利条約の各章について、子どもの権利を守るためのNGO組織であるレッタ・パーネンから出された子ども向けのパンフレットを各種見せて頂き、青木さんのスウェーデンでの学校生活での感想も交えながら説明をして頂いた。

## 《新刊紹介》

### 『高齢社会と地方分権 福祉の主役は市町村』

齊藤弥生 山井和則共著 ミネルヴァ書房

本書は2年半のお二人のスウェーデン滞在の総決算としてまとめられた研究成果である。この本のキーワードは文中にあるように「地方分権」と「民主主義、言い替えば政治参加」の二つ。この二つ言葉を軸に展開されるスウェーデンの良質の福祉・社会医療サービスがどのように充実されているかを、豊富な図や表、写真によって判り易く書かれている。

日本ではまだ縁遠く感じられる「地方分権」であるが、スウェーデンでどのような顔をしているかをこの一冊から具体的に知ることができる。

本書は生活のなかに溶け込んだ地方分権・政治参加のたくさんの事例を研究過程での様々な出会いやインタビューによる積み重ねによって具体的に述べられており、その生き生きとした息づかいや活動のエネルギーを実感できる。

福祉を支えるスウェーデンの政治が生活の場から直接発信していることをお判り頂ける一冊である。

### 『スウェーデン四季暦』

訓覇 法子著 東京書籍

この四季暦は、夏の盛りにはじまって彩り豊かな実りの季節の秋・長い冬を経て、春そして夏のはじめへと廻っていく。

森の民であるスウェーデン人との自然との関係が、それぞれの話しのなかでさりげなくときにはしみじみと語られてゆく。

季節と人生とが重ね合わされて語られる話しの数々は、人生の意味を考える糧として、自然と親しむことが彼らにとって普通のことであることや、それぞれの主人公の生き方までもがさりげなく織混ぜながら綴られている。

それぞれのエピソードが織り成す印象が、スウェーデンの青く静かにたたずむ湖のように深く心に染み込んでくる。そうした印象をモッスベリィ氏の美しい絵が、更にその思いを深めている。

スウェーデン人にとって、自然がいかにか身近で当たり前のものであり、充実した人生を過ごすことは、自然と社会生活の調和を意味していると思える一冊である。

目 次	
Article on Oe Kenzaburo	
Lars Vargo .....	1
研究会・講演会報告 .....	2
新刊紹介 .....	4